



生研五十周年に寄せて

東京大学名誉教授

(第16代所長・元第1部教授)

岡田恒男

東京大学生産技術研究所が創立五十周年を迎えると聞き大嬉しく思っている。記念の寄稿をとのことであるが、停年退官からまだ三年。現役気分の抜けきらない身で他人行儀のお祝いでもあるまい。この機会を借りて、先輩・現役の方々にお札を申し述べお祝いに代えたい。

三十年間、生産技術研究所では全く自由に研究・教育生活を送らせていただいた。耐震工学を専門としていたため、地震災害が起こると国内外を問わず現地に駆けつけ、調査・救援、引き続き調査報告書の取りまとめ、当面の対策の普及、将来の対策のための新しい研究テーマの発掘とプロジェクトの開始に明け暮れていた様に思う。その結果、いささかなりとも成果が挙げることが出来たとすれば、それは生研における様々な環境であった。

生研の重点項目の一つであった学際領域開拓の一環として誕生したと言ってもよい耐震構造学研究グループ（ERS）は、いわゆる学科の壁といわれていた建築、土木、機械の境界を越えて広く地震防災を研究する土俵を作り出した。設立当初よりERSに加えていた総合的な地震防災が何であるかを学ぶことが出来た。これは筆者のみが得た特典ではなかったと思う。阪神・淡路大震災の際のERSの現役、先輩などの活躍はその現れであろうし、震災直後に情報基地として生研の国際災害軽減工学研究センター（INCEDE）内に設置されたKobe-Netが国内のみならず海外にも知れ渡ったことはERSの永年の活動で培われた素地があつてのことと言つてよいであろう。

研究環境で忘れてはならないのは、研究支援体制である。まず、事務部門の支援。とかく硬直しがちな大学事務体制にあって研究・教育の使命に合致することであれば限界まで柔軟な対応をしていただいた。そして、電算機室、試作工場、映像技術室の共通施設からの支援。怪しげな仕様書、図面などを基に研究目的を理解するまで付き合っていただいた。今、建築界では、「仕様書型設計から性能型設計への変革」が大命題である。どちらかと言えば「仕様書型」を指向しがちな事務並びに共通施設が、生研ではかなり前から「性能型」の体制を指向していたことに最近気づき始めている。

後一つが、キャンパス環境。まず、千葉実験所。広い敷地で思う存分実験をさせていただいた。六本木からの距離はハンドディがあると言われる方多かったが、小生には苦になるどころか、実験に専念できる格好のキャンパスであった。メインキャンパスから適度の距離の実験所は生研のような研究機関に取っては必須ではないか。最後に、六本木キャンパス。最高の都心立地、まあまあの広さの敷地、そして、劣悪極まりない建物。建築を専門とする筆者にとって一番頭の痛い問題であった。三十年間で建築計画委員会、營繕委員会などこの問題を取り扱う委員会に所属しなかったのは長期海外出張中の一年余だけであった。念願かなってやっと駒場の地に新研究棟の第一期部分が完成したと聞く。まずまずの都心立地、かなりの広さの敷地、そして、立派な建物。生研に舞い戻りたい気分である。

先日、生研の元の同僚に「新研究棟の印象は？」聞いてみた。「ウーン、何とも言えませんね。」との答えが返ってきた。実物は未だ拝見していないが、我が畏友原廣司君の設計だからさもありなんと思う。彼のことだからいろいろな仕掛けの空間を用意したことだろう。当初は多少の戸惑いはあっても、きっとすぐ彼の仕掛けた空間を使いこなして今までより遙かに快適な研究環境を作り上げていただけることだろう。空間を仕上げるのは住み手の腕だから。